

文化財  
NEWS速報

## 橋本左内の墓旧套堂復元一件



越前水仙



橋本左内の墓旧套堂

回向院に竣工した当時の套堂  
(『景岳会史』、1935年)荒川ふるさと  
文化館だより

荒川区教育委員会  
荒川ふるさと文化館  
荒川区南千住6-63-1  
TEL 03(3807)9234  
登録 (20)0037-2号

旧套堂の姿 そもそも旧套堂は、昭和 8 年（一九三三）、橋本左内の墓（区登録有形文化財〈歴史資料〉）を保護する（納める、覆う）ために造られました。大正 12 年（一九二三）の関東大震災後に耐震性と不燃性の観点から注目されるようになつた鉄筋コンクリート造で、規模は方一間（柱間 1.94m）、宝形造の屋根、軒裏および柱・梁等の軸部には、表面に人造擬石洗出・研出仕上げを施しており、伝統的な建築の意匠と近代的工法との折衷を図った近代仏教建築です。今やコンクリート造の仏教建造物は珍しくありませんが、その最初期の現存例としても大変貴重です。

旧套堂に関わった人びと 旧套堂は、福井藩士橋本左内を追慕し、遺徳を広く発揚することを目的として、明治 35 年（一九〇二）に設立された景岳会によって建てられました。設計には、同会会員で建築家でもあつた原田正がたり、歴史学者黒板勝美（古社寺保存会委員・東京帝国大学教授）に助言を行なわれています。また、正面に据え付けられた陶製の橋本家の家紋は、福井県出身で、日本の陶彫のさきがけとして知られる沼田一雅（東京美術学校教授）が手掛けられています。旧套堂は、当代一流の学者の知識・技術・感性が結集した文化財なのであります。

旧套堂と南千住／幕末・福井県 ところで、南千住には、この旧套堂ばかりではなく、幕末の史跡、福井県ゆかりの史跡が点在しています。回向院境内北側に新たに設けられた史跡エリアには、橋本左内の墓や小浜藩士梅田雲浜の墓があり、同院内には、小浜藩医杉田玄白らの「ターヘラアナトミア」の翻訳と「解体新書」の刊行を記念してつくられた観瞻記念碑があります。これらは地元住民にとっては、いたって身近な文化財ですが、福井県の方（勿論全県民ではありませんが）にとってはぜひとも行ってみたい史跡の一つなのだそうです。旧套堂が多くの方々のご協力を得て、この地に復元されました。今、「橋本左内の墓旧套堂」は、地域の歴史を伝えるモニュメントとして、また荒川区と福井県との交流の場として、新たなスタートを切ることになります。

（亀川泰照）

\*『荒川ふるさと文化館だより』第 16 号もご覧ください。

## 文化館おすすめ

### 近代日暮里編

江戸時代、文人たちに愛された日暮里には、彼らの足跡がそこかしこに残っています。これらをめぐるものが、日暮里の史跡めぐりの常識ですが、今回は常識外れ（？）の近代日暮里の史跡めぐりをご紹介します。

出発は JR 西日暮里駅。西日暮里駅のガード下、道灌山通りを通つて駅の西側へです。道路の北側には大きな崖があるが、これは昭和 5 年に道灌山通りが拡張された際に切り崩されたもの（写真 1）。江戸時代、この通りは新堀村から三河島村へ通じる主要な道で、明治時代、字蛇塚に日暮里火葬場ができると「焼き場道」と呼ばれたという（平塚春造『日暮しの岡』）。

崖の上には開成学園がある。大正 13 年に神田から日暮里に移転してきた。

大正 12 年の関東大震災以前から移転計画

はあつたが、震災で神田の校舎が倒壊したのを機に移転し、現在に至る。



（写真 1）現在の道灌山通りの切り通し



（写真 2）向陵稻荷坂

向かって右の石垣は旧渡辺六郎邸の石垣。旧渡辺六郎邸は、現在は、開成学園の第 2 グラウンドになっている。左奥は向陵稻荷。

暮里四丁目付近は、江戸時代の道灌山で秋田藩主の佐竹家の抱屋敷があり、また秋には虫聴きの名所として有名なところだつた。明治以降荒れ果ててしまつた「道灌山」を開発したのが、東京渡辺銀行の系列企業の渡辺保全会社である。「日暮里渡辺町」には、実質的な開発者である渡辺六郎や、画家の石井柏亭や作家の野上弥生子といった著名な文化人たちも多く住んでいた。

開成学園沿いにある「ひぐらし坂」を登つてみよう。坂の名前の由来となつた「ひぐらしのさと」とは本来、西日暮里三丁目付近、つまり江戸時代の名所として多くの文人が訪れた花見寺・月見寺・雪見寺をさす。開成学園付近は「道灌山」で「ひぐらしのさと」ではないのだが、「ひぐらし坂」と呼ばれる。時が経つとともに地名の指示示す場所が変化するひとつの事例といえる。ひぐらし坂を登りきり、少し歩くと線路を見下す場所がある。ここから市街地と化した現代のあらかわの姿が眺望できる。

さて開成学園の周囲をぐるりとまわり、向陵稻荷坂に登る。途中には佐竹家の屋敷内にあつた向陵稻荷がある。現在では、開成学園の脇にあることから、合格祈願の神様として受験生に大人気だそうだ。向陵稻荷の向かいには、現在開成学園の敷地となつてゐる旧渡辺六郎邸の石垣（写真 2）が残る。

さて、道灌山通りを渡り、西日暮里三丁目に入る。線路脇の急勾配の坂道「まの坂」を登る。昔は荷車押しがこの坂道の下にいたとか。まの坂を登りきると、そこには西日暮里公園がある。鬱蒼と木々が茂る公園だが、江戸時代には、花見寺と呼ばれる青雲寺の境内で、滝沢馬琴の筆塚碑や日暮里舟繫松の碑があつた。明治 7 年には、旧加賀藩の前田家の墓地になり、墓地の整備の際には、馬琴愛用の硯や建碑の年号を記した銅板なども出土している。

次に諏方神社へ向かう。諏方神社の鳥居脇にある「新東京八名勝日暮里諏方神社」と書かれた碑は必見。荒川区が発足した昭和 7 年、報知新聞社にて新東京八名勝投票で選ぶというイベントが行われ、諏方神社は見事 4 位に入賞し、記念碑が建てられた。

諏方神社境内から線路方向に下る坂「地蔵坂」（3 頁上段参照）に向う。「諏訪坂ガード」をくぐり右折すると、暗渠化された農業用水、音無川（石神井用水）の上にでる。JR 常磐線の金杉踏切を渡り、そのまま道なりに行くと東側に高層ビルが 3 棟建っている。この辺りが、平成 16 年着工の「ひぐらしのさと」である。江戸時代の名所だった「ひぐらしのさと」からもこのビルを望むことができ、時の移り変わりを感じさせる。

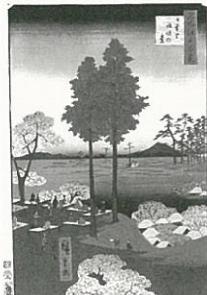
新旧のものが混在する日暮里。是非、ご自分の脚で歩き、マチの背負ってきた歴史を感じとつてみて下さい。見慣れたマチにも、新たな発見があることをでしょう。

（加藤陽子）

- 史跡めぐりは、交通ルールやマナーを守つて歩きましょう。

# —地名の— つぶやき

#### ⑩番外編ややこしい場



日暮里諏訪の台「冬所江豆百景」

平坦な所から日暮里の台地に行くには、当然ながら坂を登らなければならない。江戸時代の人びとも同様である。名所「日ぐらしの里」の中でも景勝の地諏訪台に向かう江戸つなラマを頭に描きながら、足取りも軽く登つたことであろう。

彼らが採つた選択肢の一つは、錦絵「日暮里諏訪の台」(写真)に描かれている。花盛りの春の風景、名物の自然薯田楽、土器投げを楽しむために諏方神社のある「諏訪台」を目指して人々が坂を登っている。この坂は、現在「地蔵坂」(地蔵坂A)と呼ばれる。諏方神社に隣接する旧別当寺淨光寺境内に安置されている江戸六地蔵に因む名前とされる。

江戸時代の地誌『新編武藏風土記』に登場する「地蔵坂」の解説には、「谷中の台より道灌山の下へ通る坂なり、三十間ばかり」とある。「谷中の台」とは、西日暮里三丁目の台地のことであり、そこから道灌山の下へ下る坂といえ、現在の西日暮里公園の東側を通る急な坂（地蔵坂B）のことを示した記述である。しかし、今日では、この坂は「まの坂（間の坂）」「魔の坂」と呼ばれている。

地元の古老によれば、「あまりに急なため、特に降りるときに危険だつた。昔、荷物を引いていた牛馬が足を折つたり、転んで死んだり（明治37年生れ、男性）」とか、「昔、まだ西日暮里の駅舎がなくてトロッコが走っていた

頃、人と貨車とがぶつかる事故があつた。それで魔の坂などといわれるようになつたのではないか（大正7年生れ、女性」という話も残つてゐる。これらは、交通・運輸に関わる荷物を運ぶ牛馬や鉄道から構成されており、どうやら近代以降に使われるようになつた坂名のようだ。

さて、諏訪台に至る坂（地蔵坂A）に戻ろ。江戸時代後期から明治時代前期の地図を見ると、この坂は東側の低地から諏方神社の境内に登つた所で終わっている。しかしながら、明治時代後期の地図では、諏訪台に登つた後にも道は続いており淨光寺の門前で台地の中央を南北に貫く道へと合流する。もともとここのが合流地点に地蔵堂があつて西面しておられたが、それが立っていたといわれているのだ。

灌山を経て飛鳥山方面へと向かう人びとが辿つた光筋の坂（地蔵坂B）は、参詣や遊興のための坂であり「地蔵坂」の呼称に相応しい。しかしながら、明治時代になつて鉄道が敷設されたり、前田家の墓地（現西日暮里公園）ができしたことにより、この道筋の意味合いに微妙な変化が生じてきたのであろう。低

地から諫方神社・淨光寺へと向う参詣に相応しい道として、現在の坂（地蔵坂A）が選択

され、「地蔵坂」の名前が定着していったのではないか。因みに現在の「地蔵坂」(地蔵坂A)の袂のJR跨線橋には「諏訪坂ガード」というプレートが付いており、近代の国鉄の記録にも「諏訪坂」の名称が確認できる。広重が描いた坂は、本来「諏訪坂」と呼ばれていたのかもしれない。「ややこしや、ややこしや」(野尻かおる)

参考文献】「日暮里の民俗」(区教育委員会  
一九九七)、『日暮里SAIKO』(荒川ふる  
さと文化館、二〇〇九)

文学館通信 vol. 1

【皆生歎の愛した本】



るモノでもありました

家の物干台で風あげするのが好きだつた

吉村氏は、昭和17年4月18日の東京初空襲の時にも、物千台で凧をあげていました。その時に、谷中墓地方面に飛んでいく、ドーリットル飛行隊のノースアメリカンB-25を目撃しています。このことは、少年時代の吉村氏なら

現在、荒川区は「(仮称)吉村昭記念文学館」の設置に向けて、準備を進めています。

そこで、夫人で作家の津村節子氏より、寄託頂いた、吉村昭氏の遺愛品や直筆原稿などを、この関連資料の中から、今回は『風』を紹介します。

斎に置かれ、生涯を通してごく身近にありました。帆は少年時代への郷愁を感じられる空間を作り出していたのかもしれません。

【お知らせ】6月20日㈯から7月20日㈪、祝  
まで、荒川ふるさと文化館において、平成21  
年度吉村昭記念企画展「吉村昭のふるさと  
あらかわ・にっぽり」の開催を予定してお  
ります。みなさまのご来場をお待ちいたして  
おります。

〔問合せ〕 教育委員会事務局社会教育課  
文学館調査担当

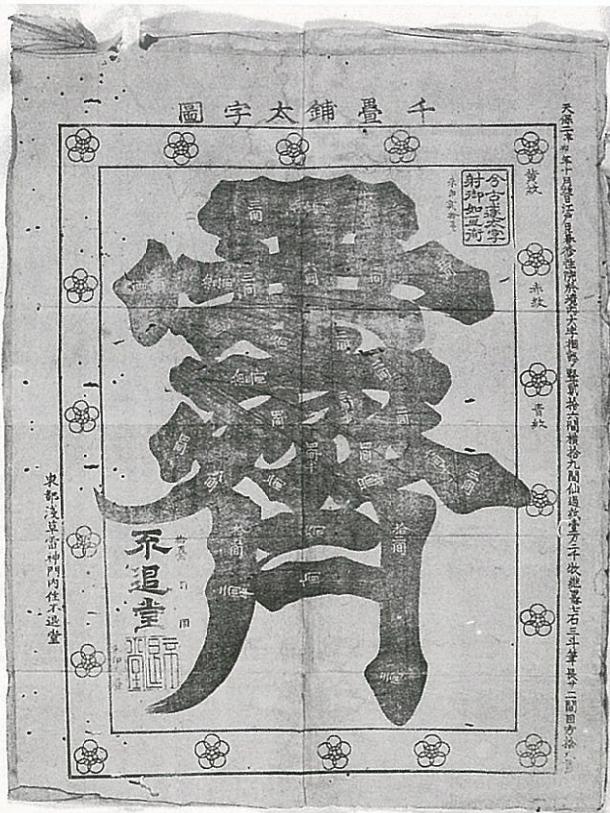
03-3802-3111(代)



卷之四

あらかわ  
タイヒトシネルズ⑯

## 不退堂はふてへ堂



「千畳鋪大字図」

(鳩ヶ谷市立郷土資料館所蔵黒田忠雄家文書。鳩ヶ谷市指定文化財)

**花見寺のイベント** 天保 2 年（一八三二）10 月 22 日、日暮里の花見寺・修性院の庭で、不退堂聖純なる人物が、「霊」という字を書いた。「セイ」と読み、天候や心がはれる、という意味をもつ。但し、その大きさは桁違い。縦約 47・2 m、横約 34・5 m の畠千畠分の大きさだった。ということは、自ずと紙・墨・筆も並外れた規模となる。紙は、お経や台帳によく使われた仙花紙という厚手の紙 1 万 2 千枚を継ぎ、筆の長さは約 3・6 m、墨は約 1262・7 ml だったといふ。と、ここまで地域の歴史通の方だったらご存知の方も多いはず。『武江年表』所収の話題で

ある。ただ、私たちの知識はここまでで、字の形とか、その評判など、想像すらできなかつた。  
**不退堂と鳩ヶ谷** ところが先日、ひよんなことからその摺物が、鳩ヶ谷市立郷土資料館で所蔵されていることを知つた。鳩ヶ谷といえば、富士講が盛んで、小谷三志の不二道孝心講が知られているが、この資料は鳩ヶ谷市に寄贈された、茨城県稻敷市伊佐部で不二道を信仰していた黒田家の古文書に含まれていたという（『鳩ヶ谷市の文化財』9）。

もともと京都鞍馬山の僧侶だった不退堂は、書家として多くの弟子を持った。二宮尊徳や小谷三志もその名を連ねている。

**千畳敷大字イベント** 不退堂は、修性院で大字を書くよりも前に、大坂天王寺（文政 10 年）などでも、弟子たちと一緒に大字を書くイベントをこなしていった。小谷三志は、文政 9 年（一八二六）、京都壬生寺で開かれた大字を書くイベントに参加している。

ただ、不退堂が書く字は、360 畠、500 畠と段々大きくなつており（以上、石川畠翠「松窓雑録」）、江戸に下る天保 2 年前後には、千畠敷に一字を書くことが宿願となつていただらしい。京都では三十三間堂、江戸では上野黒門前で願い出たが、いずれも許可が下りなかつた（以下、特に断らなければ、烏山藩家老菅谷八郎右衛門「摺循録」）。江戸の場合、元禄期に八畠敷に一字を書いた者が一人だけいたが、御府内でそんな大

きい字はまかりならん、というのが不許可の理由だつたらしい。しかし、このことは各藩の江戸公使ともいえる留守居の間で評判となつた。ある大藩の

留守居は残念に思い、日暮里の花見寺なら庭が広いということで世話をしたといふ。なにせ修性院の庭は明治末に運動会が開かれているほどなのだ。不退堂にとつては、書ければどこでもよかつたのだろうが、花見寺としてスタートをきつたばかりの修性院にとつては、いい宣伝にもなつたことだろう。

さて、念願叶つた不退堂は、その時を白袴に中抜草履といつたいでたちで臨んだ（『松窓雑録』）。桁外の大字を書くため、人が一抱えするほどの太さの打ち藁で作られた筆を持ち、筆を硯につけるのではなくて、墨を器から直接注ぎ書き上げた。ちなみに、この筆はその後浅草寺に奉納されたという。千畳敷大字図では、摺物の方を見てみよう。「霊」と大きく書いている。大きいといつても、この摺物の大きさは、縦 41・2 cm、横 31・8 cm しかない。但し、字をよく見ると、例えは、雨冠の一筆目のところに、「三間」など、線の中に太さが記入されている。体これはなんなのか？ 先の菅谷八郎右衛門は、字の縦横の長さや寸法まで詳しい「図面」だといつてゐる。なるほど上部に「千畳敷大字図」とある。ここまで大きいと現場で見ていた人には、不退堂が何を書いているのか、不明だったに違いない。実際見た人も見ていない人も、この「図面」を見て、初めて字をイメージできたに違いない。

当時の落首に次のようなものがある。

千畠に、一字とは、（太え／不思）ふてへ堂  
江戸ツ子の眼を、（寄ま／鞍馬）くらまそふとは



平成 20 年天王祭の素盞雄神社本社神輿

神輿の飾りの製作は、神輿製作職人によって行われますが、神輿を構成するパーツであるこのようないかがたの金物の飾りの製作は、別に専門の铸造職人がいて、神輿製作職人から依頼を受けて、製造しています。実はこの神輿の飾りを作っているのは、あらかわの職人さんなのです。

神輿の飾りの製作は、神輿製作職人によって行われますが、神輿を構成するパーツであるこのようないかがたの金物の飾りの製作は、別に専門の铸造職人がいて、神輿製作職人から依頼を受けて、製造しています。実はこの神輿の飾りを作っているのは、あらかわの職人さんなのです。

祭でおなじみの立派な神輿。昨年の素盞雄神社の天王祭は本祭であつたこともあります。本祭で氏子たちが神輿を担いでいる光景は勇壮で迫力がありますが、神輿自体の装飾にも目を見張るものがあります。屋根の頂点には大鳥、屋根の四方にのびる蕨手、土台に担ぎ棒を通す付け根部分には台輪飾りなど、随所に立派な飾りが目に入ります。神輿の製作は神輿製作職人によって行われますが、神輿を構成するパーツであるこのようないかがたの金物の飾りの製作は、別に専門の铸造職人がいて、神輿製作職人から依頼を受けて、製造しています。実はこの神輿の飾りを作っているのは、あらかわの職人さんなのです。

そこで重要なのが原型です。原型のおもとは木製ですが、木製は強度が弱く、何度も型取りができないため、まず木製の原型から一度、金属製の原型（種型）を铸造し、ここから何度も型取りして铸造型を作れるようにしています。

大江家には、先述した素盞雄神社本社神輿の時のものなど、これまで铸造してきた神輿の飾りの種型があります。

時代の流れのなかで伝統を守る。かつて、都内にも神輿の飾りを铸造するところが何軒があつたそうです。しかし、昭和 30 年代頃になると、路上で神輿を担ぐのが難しいという交通事情もあって、町会単位では神輿を担ぐところが減つてきました。このため、神輿の需要も減つてしまい、徐々に同業の铸造職人は神輿の飾りの铸造をやめています。

昭和 63 年に  
平成 20 年天王祭の素盞雄神社本社神輿と  
同型の大鳥の種型

素盞雄神社本社神輿と  
同型の大鳥の種型

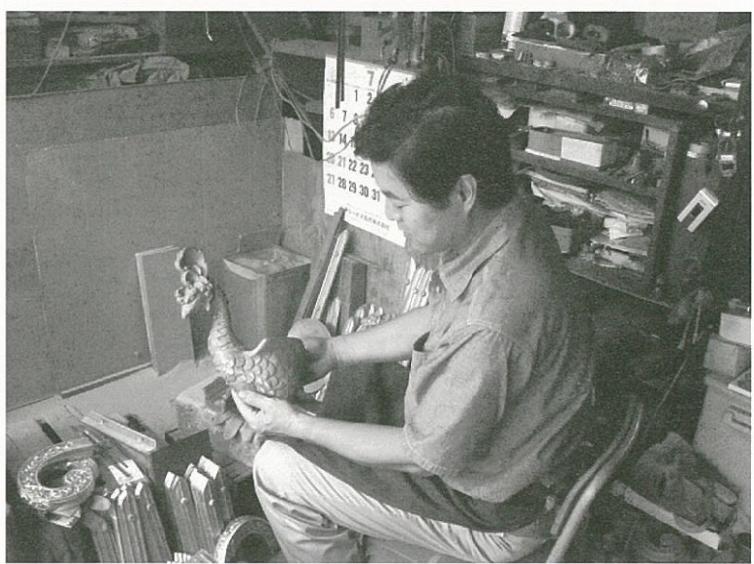
【参考】平成 19 年度企画展図録  
『千住で一番 江戸で一番 千住大橋展』  
（澤田善明）

## こぼれ話(5) 職人

### 神輿の飾り

素盞雄神社の本社神輿が千葉県市川市行徳の神輿製作職人（浅子周慶）に修理に出されました。その際に、行徳から依頼を受け、この神輿の飾りの部分を铸造したのが、先代と大江さんだつたそうです。大江さんが手がける铸造という技術は、铸造に高温で溶かした金属を铸造込み、冷めて固まつたら取り出す金属加工の技術です。铸造は、原型の表面に、粘土状に捏ねた珪砂を被せて型取りをして作られます。一度铸造に使つた铸造型は、固まつた铸造物を取り出す時に崩さねばならないので、一度きりしか使えません。よつて、また同じ铸造物を作る時には、再び同じ原型から型取りをして铸造することになります。

大江さんの铸造所では、技术面の继承はもちろん、連携する神輿製作職人との関係の継続、铸造作りに欠かせない種型の保存など、たとえ神輿需要が苦境に立とうとも、代々これらを途絶えさせなかつたことが、今に繋がっているのです。



铸造した神輿の飾りと大江さん

## 報告書刊行のお知らせ

### 『町屋四丁目実揚遺跡口地点発掘調査報告書』が完成しました。

今回刊行したのは、町屋四丁目実揚遺跡内で行った4ヶ所目の本発掘調査の調査記録をまとめた報告書です。

町屋四丁目実揚遺跡は、都電「町屋二丁目停留場」から隅田川に向かって北に 600mほど進んだ住宅街に位置します。遺跡の範囲は、確定されたものではありませんが、東西約 270m、南北約 280m の広がりを持ち、土木工事など開発行為が行われる際に、遺跡の調査が実施されています。

内容は、70 m<sup>2</sup>ほどの面積から古代の溝が3条、中世の溝が1条、近世の溝2条、井戸跡などが見つかっています。遺物は土師器、須恵器などが出土しました。この他、D地点の後に確認調査を行ったE地点の内容についても掲載しています。

本報告書は荒川ふるさと文化館1階郷土学習室や区内各図書館で閲覧できます。また、区内各図書館で貸し出しできます。興味のある方は一度ご覧下さい。

『あらかわ区報 Jr.』の創刊号から連載されている「あらかわ今昔ものがたり」が、このたび楽しい挿絵を添えて1冊の本にまとめられました。当館の開館10周年を記念して、子どもたちに向けてつくった歴史史読本です。小さい頃から子どもたちに自分のマチへの関心をもつてもらおうと、地域の伝説や歴史的な出来事について簡易な表現を心がけ全32話にまとめました。もちろん、あらかわってどんなところ、と思っている大人のあなたにもお薦めです。区内図書館でご覧いただくこともできますし、左記の場所で購入することもできます。本書を通じて身近な地域の歴史や伝説をのぞいてみてください。

販売場所：当館受付、区役所2階情報提供コーナー  
定価：240円



## 『あらかわ今昔ものがたり』出ました！



## 文化館でお買い物

今回は平成20年度企画展関連グッズ「東京府下三河島町日暮里町全図」復刻版のご紹介です。

本地図は大正14年に発行された地図を復刻したもので、現在の地図と見比べて、80年前の日暮里・三河島（現荒川・町屋）との違いを探してみるのもおもしろいのではないでしょうか。地図は荒川ふるさと文化館受付で220円にて販売しております。



## 計 報

- 荒川区登録無形文化財（工芸技術・すだれ）保持者、小山孝治氏（享年82歳、町屋）は、去る平成21年2月7日に逝去されました。
- 荒川区登録無形文化財（工芸技術・額縁）保持者、吉田吉治氏（享年84歳、町屋）は、去る平成21年3月1日に逝去されました。
- 謹んでご冥福をお祈りいたします。